慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山陵(上野竹次郎著, 山陵崇敬會發行)
Sub Title	
Author	和田, 軍一(Wada, Gunichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.2 (1926. 5) ,p.148(302)- 150(304)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260500-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山陵（上野竹次郎著　山陵崇敬會發行）

陵制の盛衰と山陵守護の厚薄とは皇室の消長を示す一の計測器である。中世以降皇室の御式微は延ひて山陵の荒廢湮滅を將來した。極端なる衰微はそれ自身の中に再生復興隆盛の因子を含有してゐることは吾々の屢々感得するところであるが、皇室の御式微の極はやがて轉じて戰國時代の皇室守護運動を招致したごとく、山陵が今日想像し得られぬ迄に荒廢した事實そのものが德川時代の修陵事業を誘致したのである。そして所在の探索と修營とを中心とする山陵問題は尊王論と互に因となり果となつて開展した。この狀勢は皇室の復古的隆盛を背景として遂に所謂文久の大修陵事業を確立し、陵制の復古、山陵の整備、山陵崇敬思想の勃興など種々なる形を執つて今日に傳へられてゐるのである。

かくのごとく山陵問題が國民の注意を受けるに至つて、學者や好事家（？）の中から特殊なる山陵研究家の輩出を見或は山陵會の成立を見たのは亦自然の勢である。しかしてそれらの人々の業績が書籍となつて我々に示されたものも遠く元祿上梓の松下見林著前王廟陵記以下その數量は決して尠くないのである。（一）山陵考證の書として前記の前王廟陵記、蒲生君平の山陵志、（二）山陵考證の基底となるべき文獻を集めたものに三條實萬の山陵私記、日野西光暉の山陵記、（三）山陵便覽に津久井清影の聖蹟圖志、陵墓一隅抄、（四）案內記に北浦定政の打墨繩、日吉明助の皇陵及歷代御事蹟、（五）特に山陵に注意したる紀行記に貝原篤信の大和めぐり、谷森善臣の鬻笠のしづく、（六）陵制史、修陵史を取扱へるものに後藤秀穗の皇陵史稿、藤田健の山陵私考などを數へ上げることが出來る。そしてこれらの書は夫々時代の特色を有ち、大體時代の變遷をその上に觀ることが出來るのである。即ち德川時代の山陵の探索時代にあつては――もとより今日にも繼續されてゐるのであるが――考證的著作が多く、山陵の所在が漸く分明になつた嘉永安政頃は便覽の類が現はれて來、明治大正となつては、交通の發達は幾つかの皇陵巡拜會の起るを容易ならしめ、それに隨從して――印刷術の進歩と印刷界の旺盛とに助けられて――やゝ多くの巡拜記案內記の類、さては山陵問題に興味を有つ人々の座右に備ふるに手頃な諸家集「山陵記集」の發刊、史的研究の發達に伴ふところの修陵史、陵制史の研究の漸く殷盛ならんとするのを見るのである。

概略上のごとく發展しつゝある山陵關係書の汎行の折柄、最近私は上野竹次郎氏の新著「山陵」を讀んだのである。

同書は昨十四年七月に發行されたのである、と云へば新刊紹介としては少しく古くなつた感があるであらうけれども、同書が私の手元に賚されたのは極く最近のことであつて、事實何等かの理由のために頒布が發行より甚しく遲れ、一般の人々の前に提供されたのは恐らく私が本書を見た時からひどく以前のことではないであらうから、拙文、亦必ずしも新刊紹介の名目を贖すものでないと信じてゐる。

本書は美濃版和裝三册一帙。本文は上下二册巡陵紀程を別册とする。

本文には卷頭に山陵沿革概要一篇を掲げ、先づ讀者に對して山

陵沿革の大要を知らしめる用意がされてある。夫は山陵の意義より始め、陵制の變化を經とし、之に配するに上古山陵の管理、中世山陵の荒廢、近世山陵の修營を以てしたものである。そして短文よく著者の意圖が傳へてゐる。

さて本文は上卷に於て神武天皇の畝傍山東北陵より陽成天皇の神樂岡東陵に至り、下卷は朱雀天皇の醍醐陵に起り昭憲皇太后の伏見桃山東陵に終る。總て百九十六陵。天皇、太上天皇、贈天皇三后、贈后、中宮、全てその奥津城を陵と稱するところの方々の現陵を崩御の年の順に隨つて網羅記述されてゐる。もとより一つ一つの御陵に關する記事說明は自ら長短あるを免れぬけれども、夫夫の御方の御系、崩御の御時、御葬送と築陵の顚末、御陵の沿革、現陵決定の事情及び現形に亘りて遺漏なきを期し、更に所在考證論の紹介批評を試み、或は異說を取次ぎ、まゝ著者の研究の結果を大膽に發表してゐる。

別卷巡陵紀程は卷頭に現陵の寫眞を掲ぐ。以て讀者に現陵の概念を與へ、又本文說明の補助たらしめてゐる。紀程本文は冗言するまでもなく御陵巡拜者の利用すべき交通機關及び順路を敎ふることを以て主眼としてある。けれどもこゝにも亦一つ一つの御陵について現形、崩薨の年月、御葬送（御改葬御納骨等も併す）及び現陵の決定等に關して最も簡明なる敍述をなし、他の二卷を殘して、本卷一册が篋中に納むれば、巡陵に際して他の卑近の說明を必要としないであらう如く準備されてゐる。更に附註を加ふること少くなく、筆を陵邊の史蹟に及ぼしてゐるのは、文中所々に巡陵者のために地圖を與へたことゝ共に、假令新奇ではなくとも、山陵巡拜者の便宜を忘れなかつたものと云ふべきである。

之を要するに本書は一つの案內書であると私は考へる。（之は私の山陵書目分類に據つたまでゞある）

しからば、山陵書史――元祿以降今日に至るまでの山陵關係書の歷史――の上に於て、本書の占める位置と意義は如何であらうか。次にこのことに一言觸れて置きたい。

私は今本書を以て一つの案內書であると述べた。本書をかくのごとく觀るのは決して本書を輕視するのではない。すべて案內書はその編述、一見容易なるがごとくして、而も實は甚だ難いのである。譬へば或る事物に對して事實を正確、且つ忠實に記述すること、それ自ら容易でないのであり、尙加ふるに正しい解說と說明とを具備せしめたものは一層得難い。しかるに本書は既にこの後者の場合を超えてゐる。加之、著者の研究を加味し或は先輩の意見を紹介して後より來るものへの燭を掲げてゐるのである。本書を從來我々に提供されてゐるところの山陵關係の案內書の類に比較するならば、その量に於て群を拔いてゐるだけでなく、內容の性質價値に於て全く出色あるものである。多分この樣に他の案內書、例を出せば「歷代御陵巡拜の栞」など、を比較に出すことすら、本書の著者に對して禮を失ふものであらう。本書のこの高き價値はもとより篤學なる著者の研究に職由するのであるけれども、同時に時勢の與ることも尠少ならぬを私は信じる。既に拙文の初に述べた通り、山陵の所在考證に起つたところの山陵に關する研究は元祿以後次第に進み、維新以來特に進展し、幕末に至つて便覽が上梓され次いで案內書の出版を見、近年彌々その汎行を見るに至

つたのは山陵の整備と、殊には山陵研究の發達に基くのであるけれども、未だ本書のごとく彩大にして且つ内容の充實してゐるものを見ることはできなかつた。それは當然、一部分、近時學界の進歩、就中山陵研究の漸く見るべき旺盛、山陵崇敬思想の開展の事實に、その功を歸せなければならぬであらうことを再言したい。

以上は私が「山陵」を手にしての慌しい感想を述べたものに過ぎぬ。進んで本書の嚴密なる批評、評價をするのは只今出來かねる。既に私が著者と意見を異にする箇所も二三あり、又、一般に未だ山陵研究がそこまで進んでゐない故か、研究の總括的意見のない「山陵沿革とは別に」ことも寂しいけれども、それらのことは共に後日に讓り後日に期待しやうと思ふ。ここには唯我々が一般的に良き案内書の缺乏を感じ、その現出を渴望してゐる時に當つて、山陵に關する本書の如き良き案内書を得ることの出來た喜を表し、そして山陵を崇敬し、之に興味を有ち、その研究に志さうとする人々に本書を奬め、併せて著者に敬意を表するに止める。（美濃版、和裝、三冊一帙、定價拾參圓、發行所、赤坂區田町三ノ四山陵崇敬會）（和田軍一）

東洋史論叢（岩波書店發行）

われらの待ちに待つた東洋史論叢かいよいよ上梓せらるるに至つた。本書は我が國に於ける東洋史學の建設者であり、また其の指導者である東京帝國大學名譽教授文學博士白鳥庫吉氏の還曆を祝賀するため交友門生諸氏が其の著書を傾倒し博士に獻呈した論文集である。われらの欣快の情に堪へざるは勿論、定に學界の一大美擧といふべきである。執筆者は市村博士桑原博士等二十六氏何れも東洋史學を專攻せらるる知名の士であり、我が歴大からも橋本加藤兩教授が特に執筆せられてゐる。而して本書の主題は政治經濟哲學藝術宗教神話言語風俗法制等の諸方面に亘り、我が國支那、朝鮮、滿蒙、西域等に關する種々の問題が各其の專攻者によつて檢討せられてゐる。

次に本書に收むる論題と其の執筆者とを擧げることにする。白鳥博士遠曆記念東洋史論叢の序に代ふ（市村瓚次郎）後柏原天皇の御即位式に關する研究（淺野長武）日麗通商管見（青山公亮）高麗元宗朝の廢立事件と蒙古の高麗西北面占領（池内宏）敦煌發見「摩尼光佛教法儀略」に見えたる二三の言語に就いて（石田幹之助）支那天文學の組織及び其の起原（飯島忠夫）銅鐸の化學成分に就て（梅原末治）安西四鎮の建置と其の異同に就いて（大谷勝眞）唐宋時代の商人組合「行」に就いて（加藤繁）シヤマン教の世界觀に表はれたる佛教的要素に就いて（園下大慧）明末清初の回儒（桑田六郎）歴史上より觀たる南北支那（桑原隲藏）支那古代殉送の風習に就いて（重松俊章）明初の興墾と莊田の發生について（清水泰次）古代日本の末子相續制度に就いて（白鳥清）朝鮮黨爭の起因を論じて士禍との關係に及ぶ（瀬野馬熊）大金國志に見ゆる愛正の亂に就いて（鳥山喜一）太一について（津田左右吉）古代支那の吳語吳音に就いて（中村久四郎）支那古代の封建制度（橋本增吉）回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏（羽田亨）玉蟲翅飾考（濱田耕作）千秋節宴樂考（原田淑人）支那に傳ふる二三の Myth につきて（藤田豐八）蒙古の詐馬宴